

令和4年度(2022年度)伊丹市立松崎中学校 自己評価・学校関係者評価

1 校訓
盡 己
2 学校教育目標
すべてのことに全力で取り組む生徒の育成
3 本年度の経営方針
校訓「盡己」の具現化をめざして、授業、行事、部活動を教育活動の3本柱とし、「一生懸命勉強する」「優しい心を持つ」「感動する」生徒を育成する
4 自己評価結果

目標	アンケート番号			評価の観点	評価項目	取組と成果	各観点 の評価	目標達成 度	課題・改善方策
	生徒	保護者	教職員						
「一生懸命勉強する」 生徒の育成	④ ～ ⑥	② ～ ④	④ ～ ⑥	①学力が身につく 授業実践	教員の授業力向上	・市内研究発表会へ向けて、職員でふり返りを活用した授業づくりについて取り組んだ。教育委員会の指導主事に助言をいただき、授業改善に努めた。 ・松中版の「ふり返り」の定義を職員で共有し、生徒にも同じ内容を伝え、ふり返りの意義を教師と生徒で共通理解した。 ・授業アンケート、学習アンケートを実施し、生徒の現状を把握し、授業改善につなげた。 ・「ふり返り」の明確化により、粘り強く学習する態度が見られるようになり、全国学力学習状況調査では、記述式の無回答率が下がった。また、オープンスクールなどを通して、学校での生徒の様子や授業中の様子を見る場面が増えたことにより、保護者アンケート「子どもは楽しく学校生活を送っている」「子どもは行事に楽しく参加している」の項目が伸びた。 ・前年度よりICTの活用が進み、ICT関係はどの項目も大幅に伸びており生徒もICTの活用に慣れてきた。ICTの効果的な活用について、教科ごとに対応が図れるようになった。	3		【課題】 ・生徒の「授業はたのしくわかりやすい」の項目アンケート結果が4.9ポイント下がっていることから、生徒がたのしくわかりやすいと感じる授業づくりに課題がある。 ・生徒アンケート「いろいろ教えてくれる」「授業内容でわかりにくいことについて、先生に質問しやすい」という項目が若干下がっている。また「授業の工夫に努めている」のよく当てはまるがやや下がっていることから、生徒が生き生きと授業を受けていることがわかるような授業づくりをさらにに行っている必要がある。 ・生徒、保護者アンケートの「学習の成果を適切に評価している」の項目が下がっている。また、よく当てはまるについては、約7ポイント下がっている。評価についての生徒、保護者の理解を図れるようにしたい。
					計画性を持った研修の実施	・月二回の教科部会のうち、一回を職員研修を行った。 ・夏期休業中に小中合同研修会を行った。 ・ブチ研を企画し、職員のニーズに合った自主研修会を行った。			【改善方策】 ・昨年度は、タブレットの活用が大きく進み、今年度はタブレットの活用が教科ごとに定着してきている。今後もICTの効果的な活用の仕方について、組織的な対応が図れるよう研修等を充実させる。 ・学習の手引きの説明や授業のなかで評価の基準を示し、生徒がより主体的に学習へ取り組み始める授業づくりを行っていく。
					深い学びを実感させる授業実践	・校内研究授業を二回実施した。また、11月の市内研究発表会へ向けて、夏期研修会、教科部会等を利用して、職員全員で指導案を検討した。 ・市内研究発表会の公開授業においては、生徒のふり返りを活かし、「問い」のある学び合いを発表することができた。			
「一生懸命勉強する」 生徒の育成	⑦	⑤		②読書活動	図書室の整備	・学校司書とPTA図書ボランティアにより、年間を通して月ごとに季節に合った展示や、日本だけでなく世界の季節行事を工夫して展示した。生徒は毎月楽しみにしており、生徒が参加する展示も設けた。 ・新着本や話題作などを、「図書館便り」や図書室の掲示版等で紹介した。これらの啓発活動により、読書に興味を強く示すようになった生徒が増えた。 ・月例の図書委員会での活動として各学年で作る「推し本コーナー」では、インバクトのある言葉や装飾を工夫した。「第2の保健室」と言われるにふさわしい環境作りにも力を入れ、委員会終了後は図書委員全員で本の整理や掃除を丁寧に行った。	3	3	【課題】 ・コロナ禍の中において、ようやく学年ごとの貸し出しが実施できるようになったが、限られた生徒にとどまり、図書室に足を運ばない生徒が多い。 ・各教科における図書室での授業が再開されていないことが課題である。国語科以外の教科でも利用できる本や資料が多く、授業での利用を進めていきたい。 ・昼休みという非常に短い時間の中での貸し出し作業、図書室の収容人数のMAXを見定めて、成果を上げることが課題である。
					読書量の向上	・全学年が朝読書を行っていることもあり、朝読書のために多くの生徒が本を借りに来ている。そのため、朝読書向けの本を多く購入した。 ・「リクエストカード」により、生徒が希望する本を可能な限り購入した。 ・読書に苦手意識のある生徒のために、興味を持ちやすいよう、ドラマ化や映画化された本、漫画を小説化した本等も購入リストにいれ、読書量の向上に力を入れた。 ・国語科の授業においては、各学年ごとに本の帯を毎年制作しており、図書室の本を利用している。来館が初めての生徒もあり、図書室への来館のきっかけとなった。			【改善方策】 ・12月段階で貸出冊数は、昨年度比増の10,000冊を超えた。今後も「居心地の良い図書室」づくりを継続していく。 ・昼休みという短い時間での貸し出し作業や、図書室の収容人数のMAXを考えると、貸出冊数の増や来館人数の増を、どのように進めていくべきか図書委員会を通して意見交換を行い、1日来館者数60～80名、貸出冊数80～100冊を目指していく。 ・常に図書館司書や学校図書担当教師と連携を図り、より一層の改善を図っていく。
	⑬ ⑭	⑩ ⑪	⑪	③進路指導	進路指導体制の充実	・進路希望調査を計5回実施し、生徒と保護者の間で進路について話し合い、考える機会を適宜設定した。 ・多くの担任が複数回3年生担任を経験していたこともあり、生徒の相談にも的確に対応できる体制ができていた。また、初めて3年生を担当する教師に対するサポートもスムーズに行った。 ・オープンハイスクールへの参加履歴を担当手持ちの進路指導資料に組み込むことで、スムーズな進路指導を行うことができた。	3		【課題】 ・兵庫県下の私立高等学校もオンライン出願への移行が進み、出願手続きに生徒・教師ともに戸惑う場面が多かった。 ・生徒対象の全体進路指導が1度しか行えず、担任頼みになってしまう部分があった。
					生徒・保護者への情報提供	・進路通信を発行し、最新の情報を発信した。 ・昨年できなかった対面形式による進路説明会を実施することができた。 ・「進路指導からのお知らせ」の教室掲示・廊下掲示やスクールタクトで進路指導連絡をしたり、生徒によるオープンハイスクール体験レポートを掲示したりすることで、進路に関する情報通知・連絡を行った。			【改善方法】 ・学校ごとに手続き順序が微妙に異なるため戸惑いが発生した。各校の要項を教師がしっかりと確認する必要がある。ただし、年度末の私立高等学校への要望受付の際に統一化の要望も出しておく。 ・総合・学活担当と連携し、年度当初から実施計画を立てておく。
			④		④学習タイム	系統的・継続した実施	・1、2年生のテスト前、3年生については9月よりテスト前以外のGT実施を行った。 ・1、2年生についてはテスト前学習として取り組むことができた。 ・3年生は受験期になり、1学期の臨時休校等による授業時間確保だけでなく、試験に向けた学習の機会にもなった。	3	
学校関係者の意見				【良い点】 ・振り返りの意義を教師と生徒で共通理解したことで明確化し、粘り強く学習する態度が見られるようになり、全国学力状況調査で、記述式の無回答率が下がった。 ・コロナ禍で行事が中止や縮小してきたが今年度は、保護者アンケートでも「子供が楽しく学校生活を送っている。行事に楽しく参加している。」の項目が伸びた。 ・図書室の整備、季節に合った展示や生徒が参加する展示など、いろいろな工夫で「第2の保健室」と言われるにふさわしい環境作りに力を入れた。 ・生徒によるオープンハイスクール体験レポートを掲示したり、進路に関する情報通知、連絡を行った。 ・「振り返り」「朝読書」「GT」など目的がわかりやすく定着してきており成果にもつながっている。ぜひ継続してほしい。 ・学校司書と図書館学校支援ボランティアの連携の上に、PTAによる図書ボランティア活動と図書委員会活動が加わって図書室の環境整備がなされたこと。 ・「第2の保健室」と言われるにふさわしい環境作りにも注力されたこと。	【課題】 ・生徒アンケート「先生はいろいろな工夫して教えてくれる」が52.9%、保護者アンケート「先生は生徒の学力向上のため、授業の工夫等に努めている」が21.8%と言う結果をどう受け止めるのか。 ・「先生は学習の成果を適切に評価している。悩みや不安に対して相談に乗ってくれる。将来の進路について、正しい情報提供や指導してくれる。」と生徒は良い評価をしているが、保護者は、「学習の成果や将来の進路について適切な指導を行っていない」と評価している。保護者の願いに応えていないと評価している。 ・生徒は自己肯定感が低いと感じている。「一生懸命続ける目標」の取り組みで自信をつけることができると期待している。 ・先生への質問をしにくいと感じていると感じる。質問しやすくなるような工夫や生徒同士で教えるなどの時間が取れないか。 ・土曜学習参加者のアンケート結果では、今年度も、子どもサポーターや土曜学習推進に時間をかけて細かく説明してもらえたのが良かったと言う声が上がっている。 ・塾に通っていないかもしれないが、学校の先生に「教えてください」と言うタイミングを見つけれない生徒が、まだまだいるのではないか。	【改善点】 ・生徒が受け身でなく自ら進んで取り組めるような学習環境を作る。目標に向けて主体的に行動し、探って究める生徒を育てる。 ・保護者に向け、今まで以上に学校のことを発信する。「できる・わかる」授業の追求、学習意欲を高める授業づくりなど、保護者に伝わるような企画が必要。いつでも学校に来てもらいたい意見や願いを言ってもらえる環境づくり。 ・自分の良い所に気づかない、大人が良いところや可能性を伝える。時間を大切にし、主体的に計画性を持って粘り強く取り組む生徒を育てる。 ・疑問に思ったこと、感じたことを言える環境づくり。質問等に真摯に向き合う教師側の姿勢をつくり信頼関係を構築すること。 ・テストの点数をプロフィールに付けて終わりではなく、自分より点数の低い子がいることで安心している。答えの見直しをしているが、フォローによって少しづつでも点数が上がると意欲が出るのでは？ ・生徒全員、同じような理解力を持っているわけではないので、人によっては、まずは基本的なことからはじめ、そこが達成されたら次のレベルへ進み、達成感を実感してもらうことの繰り返しが必要。これは中学校に進学してからでは遅く、それ以前の小学校でも行う必要がある。 ・塾に通っていたら勉強ができるようになると言うのは、ある意味では間違いであり、生きていく中で、何をするにしてもメッキをしてもわからないとできない可能性が高くなる。 ・最後には、自分の足で立って自分の力で生き抜いていかないといけないので、授業毎の「振り返り」を確実にしていくように、やらされるのではなく自ら学ぶ姿勢を身に付けるように導く必要がある。			

「優しい心を持つ」「感動する」生徒の育成	② ③ ⑦ ⑧ ⑬ ⑮	② ③ ⑤ ⑬ ⑮ ⑲	③ ⑤ ⑦ ⑮ ⑲ ⑳	⑥生徒会活動	生徒会活動の活性化	3	【課題】 ・コロナ禍において、生徒会活動自体と生徒主体的な取り組みをする機会が未だに制限されている。 ・体育大会における生徒会種目などの実施されなかった行事の継承性の確保が課題である。 【改善方法】 ・可能な限り生徒会活動を実施し、生徒が主体的に取り組める機会を増やす。 ・思いやりの心や自尊感情を高める取り組みを実施する。 ・継承すべきものは継承するが、新しいものを作り上げていく精神で取り組む。 ・給食委員会と保体委員会が新設され、取組を実施していくが、様々な課題が出てくることも予想される。生徒会本部役員が中心となり、段階的に仕事内容などの協議を行っていく。
	⑬	⑬	⑬	⑦健全な食生活	早寝・早起き・朝ごはんへの取組	2	【課題】 給食指導や保健指導などを通して朝ご飯の大切さや規則正しい生活を呼びかけているが、まだ不十分と言える。生徒たちの家庭での生活を更に把握し対応していく必要がある。 【改善方策】 ・睡眠時間や朝ご飯を食べているかなど、生徒の生活実態の把握。 ・各学期ごとに生徒の実態把握のアンケートなどを行い規則正しい生活の重要性について指導するなどの工夫をする ・PTAと協力した、「早寝・早起き・朝ごはん」の啓発活動を行う。
学校関係者の意見				【良い点】 ・部活動加入率が増加している。 ・「学校行事は楽しい」と答えている生徒、「子供は積極的に学校行事に参加している」と回答している保護者が多い。 ・生徒指導は1人で抱え込むのではなく、学年指導、管理職と連携し対応している。 ・不登校生徒への対応、「教育支援センターやまびこ」との連携がなされている。 ・特別支援の必要な生徒の実態把握や支援の方向性を学年会や特別支援委員会で共有し、生徒理解を深めることができた。 ・個別の支援計画の作成、目標や支援内容の見直し、教育支援計画を進路先に引き継いでいる。 ・部活動や行事などを通じて自主性や人との関わり方を学べている。 ・スクールソーシャルワーカー、スクールカウンセラー、「やまびこ館」等関係機関と連携をとってふれあい相談員にもフル稼働してもらって、「チーム学校」として、問題行動や不登校に対処されていること。	【課題】 ・長期欠席者66人、「学校が楽しくない」約20%生徒への対応 ・問題行動に対する指導体制が整備されていないと回答されている教員の数20%の改善 ・いじめ、問題行動、SNSなどのトラブル件数が例年以上に発生している。 ・「先生は生徒の悩みや不安に対して相談に乗ってくれる。」アンケート項目が生徒と保護者の回答に差が見られ、保護者の肯定的な割合が低い。 ・支援が追いつかない。必要な支援の内容が様々で、個別の対応がしきれていない。 ・人を大切にせる教育として、他者から認められることで自尊感情を高め、自分を大切に思う心、他者をも大切にせる心をどう育てるか。 ・自己肯定感をいろいろな活動を通じて高めるように、達成感を味わえるような活動にしてほしい。 ・不登校生徒への学力面でのフォローをどう行うか。 ・「早寝・早起き・朝ご飯」について、なかなか改善されていない。 ・先生方としてまず生徒保護者と信頼関係を構築することができているかどうかが前提条件として必要ではないか。	【改善点】 ・生徒の頑張りを認めてくれる先生、困っているときに十分対応してくれる先生、そういう先生の評価が高まることを期待する。 ・不登校の生徒のつまずきに気づき、学校に「自分の居場所」を加工すること。 ・「学び直し」ができる環境、別室登校、時差登校など生徒と関わりを持つこと。 ・個人に寄り添いながら、生徒の良いところ、好きなことを伸ばすこと。追いつかない支援に対して、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーと連携して、保護者が学校に相談できる機会を多く作る。 ・人が育つ原動力は、新たな挑戦、興味関心、好奇心、考える、工夫する、行動する。その時、学校のできる役割は、教員が評価してあげる、自己肯定感の育成、自己を見つめることが必要である。 ・不登校生徒の一面や人を苦手とする生徒への対応など考えてほしい。 ・「遅寝・遅起き・朝ごはん抜き」については、先生方がいくら口酸っぱく生徒に訴えても、改善は難しい。 ・先生方として、「こういう大人になってほしい」と願っていることを、生徒や親に伝え自覚してもらわないことには、変わらない。 ・テレビ報道等では、学校の調理室で、地域の人が朝ごはんを作って、食べないでやってきた子供に、毎日食べさせている。これは資金面も含めてよほどの協力がないと難しいことである上に、朝ごはんを食べて授業に出ると言う事しか解決していない。 ・先生方で抱え込まないで保護者も地域も一緒になって考えることで、何か良い案が出てくるのではないか。	

目標	アンケート番号			評価の観点	評価項目	取組と成果	各観点 の評価	目標達 成度	
	生徒	保護者	教職員						
開かれた・信頼される 学校づくり	①	①	① ②	①学校運営協議会	学校経営への意見反映	・CSディレクターを軸とした協議会を学期に1回開催した。 ・昨年度協議・要望した学校施設整備の改善が、十分行われた。 ・環境整備奉仕活動を開催するにあたり、地域他各団体等から総勢122名の参加を得、充実した活動となった。 ・学校便り・HP等、保護者・地域に発信した学校情報をもとに熟議を行った。 ・新型コロナウイルス感染予防対策を講じた上での今後の授業・行事・部活動のあり方について、熱心に協議した。 ・「トライやる・ウィーク」体験発表会の参観など、徐々にではあるが、生徒の活動の様子を直接見る場が増えてきた。 ・次年度の学校経営方針について協議し承認を得た。	3		【課題】 ・学校運営協議会について、保護者理解を更に高める。 ・学校の現状に関する情報をさらに発信し、熟議に努める。 ・小学校区を含めた松中ブロックとしての連携の充実。 【改善方策】 ・HP、学校便り等による広報活動に努める。 ・PTAや地域の方と共に(コミュニティ・スクール)に関する研修を実施する。 ・PTAとの連携により周年行事等の検討・調整を行う。 ・行事等参観の機会をもとに、情報共有の場を増やす。
				②学校評価	PDCAサイクルの実行	・学校評価資料としてのアンケート(生徒用、保護者用)を昨年度からGoogleフォームを用いて実施したが、今年度は職員用も同様の方法で行った。 ・校長による分析を、職員会議等で共通理解し、各部分掌において成果と課題を検討した。生徒、保護者、教師の結果については、3年間の経年比較を行い、現状の把握や学習指導及び生徒指導の改善に活用した。	3		【課題】 ・学校評価結果をもとに、各分掌で検討した内容を共通理解し、次年度に向けて具体的な学習指導や生徒指導として実施していく必要がある。 ・アンケート用紙で実施していた頃と比較して、保護者の回答率が下がっている。 【改善方策】 ・行事や研修会ごとのアンケートを活かし、次年度に向けて引き続き改善を図る。 ・学校評価の結果を共有し、本校の課題を見据えた年間指導計画等を組んでいく必要がある。 ・保護者に対してGoogleメールで回答の提出を促す。Google加入率を上げる。
		⑮	㉔ ～ ㉚	③保護者・地域との 連携	地域への公開、参観授業の実施	本年度は1、3学期に授業参観を実施できた。 体育大会、文化発表会、トライやる発表会等保護者の参観ができるようになった。 学年ごとの開催等従来の形ではないため、参加率は低かった。 (保護者の学校行事への参加 R4年度52.8%、R3年度 R2年度未実施、H31年度89.1%、 H30年度86.3%)	2	3	【課題】 ・生徒の主体的な取り組みをいかに行うかが課題である。 ・実施されなかった行事の継承性の確保が必要である。 【改善方法】 ・可能な限り生徒会活動を実施し、生徒が主体的に取り組める機会を増やす。 ・思いやりの心や自尊感情を高める取り組みを実施する。 ・継承すべきものは継承するが、新しいものを作り上げていく精神で取り組む。
	生徒、教師の地域行事への参加				・ウィズコロナに方針が変わり、少しずつ地域行事が実施されるようになった。 学校運営協議会主催の奉仕活動にサッカー部が、SC21主催の「吹奏楽のタベ」に吹奏楽部が、クリスマスイベントに演劇部が参加した。またボランティアを募集しておこなった避難所体験にも、少数であったが生徒の参加があった。生徒会本部役員による「追悼のつどい」への参加も実施した。(全国学力・学習状況調査「今住んでいる地域の行事に参加していますか」 R4年度24.3%、R3年度31.8%、R2年度35.3%、H31年度42.3%、 ※R2年度は全国調査未実施のため、自校実施・集計による)				
	学校からの情報発信				・学校だより、学年・学級通信、保健だより等定期的に発行した。 ・学校HPを随時更新し、学校行事等タイムリーな情報発信につとめた。 ・学校だより、学年通信を掲示板へ随時掲示し地域への啓発につとめた。 ・学校運営協議会において、学校教育活動に関する情報提供と共通理解を図った。 ・校区内3小学校地区会への出席と、学校教育活動に関する情報提供を行った。 ・月1回校区校長会を開催し、情報提供と情報共有を行った。				
	学校関係者の意見				【良い点】 ・ウィズコロナで、少しずつ地域行事が実施されるようになった。 学校からの情報発信、学校評価アンケートの実施、地域や保護者に「開かれた学校づくり」を通じて連携を深める取り組み。 ・学校行事など保護者の参観ができるようになってよかった。 ・SC21こやの里が取り持ったイベント2つに、吹奏楽部と演劇部が協力してくれたこと。また学校運営協議会主導で実施した環境整備奉仕活動にサッカー部の協力を得られたこと。		【課題】 ・安全な教育環境の確保と防災意識を高める情報発信。 ・保護者地域との連携の自己評価が「あまり達成されていない」と回答されていること。 ・コロナ禍で実施されなかった行事や取組をどう継承していくか。 ・保護者アンケート「相談できる生徒がいる」の当てはまらない率が高い。保護者との交流が少ない、気軽に話せる機会を増やしたい。 ・生徒・教師の地域行事への参加については、地域行事が確実に行われるということ、地域との間を取り持つ存在が必要であるということが最低条件として欠かせない。 コロナが収束しつつある1年だったとはいえ、すべて昆陽里小学校地区がだけが対象になってしまった。		【改善点】 ・コロナ禍で地域との交流が少なかったが、ウィズコロナ活動を学校から発信する。 ・「自分たちの住んでいる地域を良くしたい」「子供の通う小学校、中学校を良くしたい」の思いを持った保護者が集う場所が学校だと感じるような取り組み。 ・地域の原動力は子育て世代の保護者。「地域の良いところ」「こうなったら良い地域になる」「今の時期で困っていること」「直したら良いところ」「自分たちが地域でできること」「地区協議会と学校が連携してできること」を発信する。 ・新たな挑戦、興味関心、好奇心、考える、工夫する、行動する地域になるよう学校運営協議会を通じて情報発信をする。 ・地域、学校はフルオープン。来るものは拒まずのボランティア精神で協力していただき、様々な行事に参加していただく。創立50周年の周年行事に向けて、地域にいる多くの卒業生(生徒の保護者も卒業生と言う例もある)、地域に愛着を持ち地域を良くしたいと言う卒業生を発掘していく。 ・周年行事を機会に、生徒、学校、保護者、地域がつながる取り組みをする。 ・松崎中学校ブロックとして、昆陽里小学校、花里小学校、池尻小学校の学校運営協議会と合同で、拡大学校運営協議会を開催してはどうか。その場で、「早寝・早起き・朝ご飯」の充実と学力向上を基盤において、「どんな子どもに育ってほしいのか」「どんな大人になってほしいのか」など、ざっくばらんに話をしてみてもどうか。昆陽里小学校・花里小学校からは、私学入学の生徒を除くと全員松崎中学校に進学することでもあり、共通の思いを持って、先生方も保護者も地域も動けば、何か見えてくるものがあるのではないかと。 ・生徒・教師が地域に出ていくためには、また地域と連携をするには、まず地域は学校の現状を知る必要があるし、学校も地域の現状を知る必要がある。

※ 項目の評定については、生徒、保護者、教師のアンケート結果等から判断し評価する
(4:達成されている 3:ほぼ達成されている 2:あまり達成されていない 1:達成されていない)

4 自己評価における特記事項 ・生徒アンケート結果(全学年)の経年比較(R1→R2→R3→R4) 「学校へ行くのが楽しい」 82%→75.8%→80.0%→82.7% 「学校行事は楽しい」 91.2%→87.8%→90.1%→92.9% 「授業はわかりやすく楽しい」78.6%→72.2%→85.1%→80.2% 「先生は生徒の悩みや不安に対して相談にのってくれる」84.6%→83.4%→88.8%→88.9% 「自分には良いところがある」 73.2%→70.5%→72.6%→76.9%	・保護者アンケート結果(全学年)の経年比較(R1→R2→R3→R4) 「子どもは楽しく学校生活を送っている」 86.2%→84.1%→85.9%→87.4% 「子どもは学校行事に積極的に参加している」 92.5%→88.9%→91.5%→91.4% 「先生は、授業の工夫に努めている」 76.8%→80.3%→86.6%→82.8% 「学校に子どものことについて相談できる先生がいる」 65.3%→65.5%→71.1%→78.7%
・コロナ禍の中で実施してきた行事や部活動、生徒会活動等見直しを行い、生徒が主体的に活動できる体制づくりに繋げる必要がある。 ・保護者の期待度が高いと捉え対応することが大切である。 ・自己有用感を一層高めるため、個々の生徒へのカウンセリングマインドに基づくきめ細かな対応に努める必要がある。 ・一斉指導型の授業から、「問いのある学び合い」ができる授業へ展開し、主体的に学ぶ力を育成する必要がある。	